様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０９１９

研究課題名（和文）言語機能分析を用いた心理療法の効果研究

研究課題名（英文）Effect analysis of psychotherapy by Systemic Functional Linguistics

研究代表者
福島　哲夫（FUKUSHIMA, Tetsuo）

大妻女子大学・人間関係学部・教授

研究者番号：６０３１６９１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　心理療法の中でクライエントとセラピストによって使用される言語とその言語がともなう感情について、言語学の視点と臨床心理学の視点から分析した。言語学的な視点からは、家族療法における評価言語の分析から関係構築のメカニズムが量的・質的に明らかにされた。また、心理学的な視点からは感情表現の内容と強さ、またそれらに関するクラエントへのインタビューが分析された。
　全体として、評価言語や感情表出が心理療法のプロセスに関する重要な指標となりうることが示唆され、また、セラピストは心理療法のとくに中盤において、クライエントの感情表出を促進するような働きかけをする必要があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　In this study, we made linguistic and psychological analysis of the emotional words and expressions utterers by both the client and therapist in the process of psychotherapy. From the linguistic viewpoint, the manipulative mechanism of the the linguistic interaction in constructing the interpersonal relationships between the therapists and the clients was identified. From the psychological viewpoint, we examined emotional content, strength of client emotional expressions and retrospective clients' reaction by interviewing the clients after the sessions.
　We found that the linguistic evaluation of the emotional disclosure could be a significant indicator of the stage of the process of psychotherapy. Thus we conclude therapists need to facilitate the clients' verbal disclosure of his/her emotion, especially in the mid stage of process.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理療法　評価言語　感情語彙　感情表出

１．研究開始当初の背景

我が国において心理療法の効果に関する説明責任は日に日に高まりつつある（下山, 2001）。心理療法に関する実証的な研究において、事例の個別性やクライエント（以下 Cl）とセラピスト（以下 Th）によって使われる言葉の微妙なニュアンスを失わずに、なおかつ実証的に研究を進めていくことが急務と言えるだろう。

従来の臨床心理学的プロセス研究では、課題分析やエピソード分析、イベント分析により、ミクロの分析はされてはいたものの、そこには分析者の主観的な解釈が入らざるを得ず、そのために十分な客観性が担保されにくいという問題があった。また、効果研究においても Cl の症状の消失という表面的な部分を測定するか、あるいは Cl 自身のレトロスペクティブな内観報告に頼るしかなく、やはりこれもデータの精密さが欠けていた（岩壁, 2008）。一方で客観性と厳密さを確保し、もう一方で心理療法における微妙な意味の変化を言葉のやりとりを元にして理解する方法を開発することは、臨床的妥当性が高い「エビデンス」を積み上げるために不可欠である。

本研究では、特定の心理療法理論に依拠せず、より厳密にしかも客観的に面接のやりとりおよび意味のレベルの変化を捉えるための方法を探索する。まずは言語的形式に着目することによって、対人関係の文脈において、どのように意味交換が行われるのかを明らかにする。Systemic Functional Linguistics (選択体系機能言語学；以後、SFL)は、セラピストとクライエントとの言語的やりとりの中に、二者の関係性の変化、両者の主体性のあり方を言語内容と形式から検討することを可能にする。

この SFL による分析と並行して、臨床心理学的な語彙分析、感情評定、質的研究も進める。この過程を通じて SFL による分析の妥当性をトライアンギュレーションし、新たな方法を確立する第一歩としたい。

２．研究の目的

心理療法のセッション内で使われている言語そのものを一定の言語学的な手続きに従って解析・分析するという方法により、臨床的１次データをそのまま客観的に分析する方法を開発する。また、面接中の発話の仕方に大きな影響を与える感情に焦点を当て、クライエントが異なる感情状態にあるとき、どのように変容のプロセスが異なるのか加えて分析する。本研究には、二つの主要な目的がある。

（１）SFL による分析方法の確立

（２）感情に注目した心理療法分析

これによって Th の介入の特徴とその介入が Cl に与える影響、さらに心理療法の経過による Cl の変化がすべて言語の側面から測定される。このような測定・分析により、臨床的な言語データそのものの分析によるプロセス研究と変化の測定、すなわち効果研究が可能になると考えられる。

３．研究の方法

複数の心理療法事例の録音データから、逐語録（トランスクリプト）を作成し、それを上記の観点から分析した。また、録音データを、複数の臨床心理士によって音声評定を行い、さらに Cl と Th にインタビューを行った。

４．研究成果

●家族療法を素材とした言語学的研究１

本研究では，感情価を伴う評価言語に関するアプレイザル理論を参考に態度評価を、日本語による家族療法の面接トランスクリプトに適用して量的分析を行い、Th と家族員の対人的関係性構築の側面を評価言語の観点から論じた。

具体的には、設定を同じくするデモンストレーション面接を比較することにより、各 Th

の言語的相互作用上の諸特徴を、対人的関係性構築の観点から、「効率的」な相互作用と考えられる形態からの偏差とみなし言語解析を行った。論点は大きく分けて以下のようになった。(1)評価量の多寡が対人的相互作用においてどのように作用するのか。(2)何が交渉の焦点となっているのかの俯瞰。(3)各 Th の対人的関係性構築プロセスの特徴について、評価言語の使われ方の側面。以上の3点から、マクロ的要約をはかった。

各セッションで用いられた評価語彙-表現を分類、次の項目について計量し、得られた結果を基に、効率的相互作用からの偏差特定という視点より面接テクストの質的分析を行なった。

計量結果より、(1)面接プロセス操作資源としての評価言語の特徴、(2) 評価的意味の交渉プロセスとその逸脱形、 (3) 交渉の焦点、 (4) 統計的有意差項目から見る対人的関係性構築プロセスの特徴、(5) 面接展開上の特徴、が明らかになった。(詳細は加藤, 2012)

家族療法は初回面接から第3回までの面接の展開が、その後の治療システム形成の成否を握る(亀口, 2006)。本研究は Th がこの重要期の面接で、各家族員との対人関係をどのように築いているのかに焦点を絞り、それを評価言語の観察を通して、関係性構築するために「効率的」と考えられる相互作用のあり方からの偏差として、各 Th の技法を概観した。この偏差部分は各 Th が拠って立つ臨床理論に負う戦略とみなされる一方で、Th の資質・その独自のテクニックに負うものとみなすことも可能である。

家族は１つの社会システムであり、システムとしての相互作用の解析視点が求められるが、本研究では個人の視点に解析の焦点を置いた。また計量結果に基づいた言語分析は、言葉の使い方に関しての臨床家の訓練においても有用であり、臨床家が心理療法面接の中で、どのような場面でどのような言語資源の選択を行うのがより高い効果につながるのかについて、実際的に明らかにできよう。

●家族療法を素材とした言語学的研究 2

本研究では、量的分析で得られた計量データに基づき、面接テクスト分析を行い、相互作用の操作的メカニズムの観点から、(1)交渉の焦点としての感情、(2)判決的評価、(3)明示/喚起的評価、(4)反応、(5)力の不均衡性に焦点を当て、評価言語使用から見た Th の家族員それぞれとの対人的関係性構築上の諸特徴を解析した。

解析の結果、各 Th の相互作用上の諸特徴がそれぞれ負の偏差、正の偏差として浮き彫りとなったが、これらは効率性からの偏差に留まらず、力の不均衡を表出させるものとなった。それは各 Th が依拠する流派によるものと見なす見方があるが、一方で Th の資質・独自のテクニックに負うものとする見方も可能であろう。いずれにしても、臨床家がそれぞれの言語的相互作用を考える上での参考資料を提示することができた。

研究の限界として、ジェンダー、年齢、スピーチ・コミュニティなど社会文化的な背景についての考察は行っていない点をあげる。これらは言語選択に影響を及ぼす重要な変数であり、家族内のサブシステムにはこうした世代、ジェンダーに特有の価値観の共有度が影響する。特に判断・観照評価にこれらの社会文化的価値観が反映されるが、解析は別課題とする。

●JTCM の開発

TCM(Therapeutic Cycles Model) は Mergenthaler (1996) によって開発されたコンピュータによるテクスト分析手法で、サイコセラピー面接において Cl と Th との言語的相互作用に表出する感情と認知プロセスを示す語彙を統計的に計量し、グラフィックに

描出する手法である。感情体験と認知的内省の統合を経て、Cl は 1 つの感情処理を成し、それが Cl の変化を示すものであるという臨床上の知見に基づいたものである。確立された分析手法として、TCM は治療アプローチの違いを問わず、様々な実証的な研究に応用されている。加藤はこの手法を日本語臨床に導入すべく、日本語用改訂版 JTCM の開発途上であるが、本研究では試験的に個人療法に適用し、この例を引きながら、個人療法への応用性とプロセス研究の手法としての可能性について検討を重ねている。

この手法によって、セラピーの 4 つの phase, (1) 減退期（Relaxing）、(2) 体験期 (Experiencing)、(3)連結期（Connecting)、(4)熟考期（Reflecting)が特定される。これらの phase の循環には規則性があり、成功事例では、4 つの phase (relaxing, reflecting, experiencing, connecting) がサイクルとして繰り返しながら進行するとされ、特に連結期が Cl に変化を生むターニングポイントとなる時期で、この時期を経ることが変化の必須要件であるというのが、統計的に確証されている。

考察：サイクルの有無は、マクロ（1 事例全セッションを通して）とミクロ（単一セッション）の両レベルで特定することが可能である。TCM によって Phase の特定が可能になることで生じる研究上のメリットは大きい。プロセス研究の手法として、大きな可能性を持つものである。

この研究は、現在部分的な修正をはかりつつ、自閉症スペクトラム障害と統合失調症への応用をはかり、データを集積中である。同時に解析工程の自動化の実現をはかるべく、最終的な完成までさらに時間を要する予定である。（謝辞：JTCM を開発するにあたり，Mergenthaler 先生から様々なご助言を頂いたことに，深く感謝致します。）

●臨床心理学研究

主な分析対象事例は以下の表 1. のとおりであった。

表 1. 主な分析対象事例

事例	Cl の	主訴・問題	Th	Th の技法
1	20 歳女性	大学不適応と抑うつ	60 代男性	来談者中心療法
2	20 代後半女性	情緒不定・自己愛性パーソナリティ障害	50 代男性	統合的認知行動療法
3	50 代女性	急性ストレス反応	40 代男性	情動焦点化療法
4	20 代後半女性	心理的な要因のある鬱	20 代女性	統合的認知行動療法
5	20 歳女性	社会不適応・抑うつ	20 代女性	統合的認知行動療法

＜分析方法＞複数の異なった事例（Th も複数）を録音、トランスクライブし、その中から治療の初期から終結期までのデータがそろったものを抽出して、典型例とその代表的なセッションを選び出した。さらにそれらのトランスクリプトの中の Cl の発言を感情分析の視点から意味のある単位（meaning unit)に区切り、その感情が向けられた対象、直接・間接の区別も含めて分類した。

＜感情分類＞Ekman, P. (1999)のemotion classificationやIwakabe, Rogan, & Stalikas, (2000)を参考にしつつも、ボトムアップ的にピックアップし、19種類に分類した後、ケースごとに各カテゴリーの頻度の多い12～15種類にまとめて統計的検討を行なった。

＜質的分析＞各ケースの変化のプロセスを複数の臨床心理士と大学院生による合議制質的研究法(Hill. et al.1997)による質的分析を行なった。

＜音声分析＞Iwakabe, Rogan, & Stalikas, (2000)を参考にして、面接の音声データとトランスクリプトを同時に呈示しながら、3名の臨床心理士によって感情の強さと内容に関する評定を行なった。なお、この音声分析は質的分析とは異なった時期に、異なったメンバーで実施した。

本研究における言語分析・質的分析・音声分析ともに、感情や評価言語を中心にすえることによって、セラピーのプロセスや効果の測定として非常に有効な方法となりうることが示唆された。今後はさらに Cl の問題・症状別の目標設定とその測定項目を対応させる工夫が必要であると言える。その意味では、ケースフォーミュレーションと組み合わせて使用すれば、単なる効果測定だけでなく、セラピーをより効果的に進めていくための指針や指標ともなると考えられる。

今後さらにデータを増やしていくことにより、分析結果の安定性を高めたり成功例と失敗例の比較による検討をはかる必要がある。現時点での手応えとして、成功したケースはセラピーの中でとくにセラピー中期において Cl の感情面に十分に触れており、さらにその感情が内容的にも強度としても変化していくという特徴があると言える。そして、そのために Th が十分な共感を示しながらも、その Cl の感情を肯定したり受け止める介入により、Cl の感情調整をたすけ、その後さらに Cl の「名詞化表現」や「メタ認知」を促進するような介入により、感情の肯定的方向への変化や安定化をはかっているということがうかがわれる。その意味でセラピーにおける Th-Cl 関係は、やまだ(1987)の「うたう関係」や「並ぶ関係」の中でおこなわれる情動的コミュニケーションであるが、それらがさらに精緻に戦略化されたものであると言える。今後、さらにセラピー中の戦略化された情動的コミュニケーションについて、その戦略そのものと、そこから引き起こされるプロセスを明らかにしていきたい。

＜Cl へのインタビュー＞

Kagan(1980)による Interpersonal Process Recall のガイドラインに基づき、研究協力者に面接データを提示しながら研究に必要なシーンごとに、自由回答式で質問した。

倫理的配慮：研究協力者に研究結果の公表について事前事後に十分な説明を行い、書面にて同意を得た。また、セラピーの経過と現在の生活への影響を最小限にするよう最大限の配慮を行った。

分析方法：質的分析はイベント・パラダイムの考え方と KJ 法の手法を参考に、大学院生 2 名と合議により行った。クライエントの病態水準ごとの効果、ケースの時期別の効果の検討を行った。インタビュー対象者とその反応の主な特徴を表 2 に示す。

表2 クライエントインタビューのまとめ（Clの病態水準と主な反応一覧）

Clの病態水準	Thの肯定的介入	Clの感情表出について	Thによる感情表出の促しについて
ケース1 ○ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害	初期は不信感⇒中後期は次第に肯定感	「この場で頑張って出したことを認めてほしかった」	半信半疑･テクニカルな感じ･出せているなら始めから相談に来てない
ケース2 ○境界例水準	色々な感情をもっていていいんだと思えるようになった	「始めは罪悪感があったけれどだんだんなくなった」	安心はしているけれど、抵抗もあった
ケース3 ○神経症水準	一貫して安心感と自己卑下感の葛藤	「泣いた回（#31）は気持ちがどんどん楽になった」	Thのダメなところの話やどうでもいい話で楽になった
ケース4 ○ノーマル水準	肯定してもらって心地よかった	この場で冷静にいろいろ考えることで助かった	感情表出より思考の組み立てを導いてもらった

インタビューの結果、セッション中の感情表出や Th による感情表出を促進するような働きかけに関して、これらの病態水準の異なる Cl は、その病態に関連して異なった感想を抱いていることが明らかになった。つまり、病態水準が重くなればなるほど、それらに対して疑念や葛藤を抱えていることがわかり、慎重な介入が求められることが確認された。

●まとめ

以上のような成果を生かして、今後はさらにこれらの知見と方法を心理療法の効果研究やプロセス研究に具体的に生かしていく

べく、現在、すでに次の研究に着手している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

①糟谷寛子、藤岡勲、隅谷理子、福島哲夫、岩壁茂 2014 セラピストの肯定的発話の類型化に関するプロセス研究 臨床心理学(印刷中)(査読有)

②髙岡昂太、糟谷寛子、福島哲夫 2013 怒りを表出したクライエントへの治療的対応に関するプロセス研究−課題分析を応用した合議制質的研究法による実践的対応モデルの生成−.臨床心理学.第 13 巻第 3 号. 391-400（査読有）

③加藤澄. 2013.「評価言語より解析する家族療法面接における対人関係性構築のメカニズム：量的分析」『家族心理学研究』第 27 巻第 1 号. 29-43. 単著. (査読有)

④岩壁茂 2013 臨床心理学における研究の多様性と科学性-事例研究を超えて 臨床心理学第 13 巻第 1 号. 313-318.(査読有)

⑤岩壁茂 2013 臨床心理学最新研究レポート第１回心理療法における関係性の深みの研究. 臨床心理学第 13 巻第 1 号. 25-35.(査読無)

⑥加藤澄. 2012.「評価言語より解析する家族療法面接における対人関係性構築のメカニズム：質的分析」『家族心理学研究』第 26 巻第 2 号. 115-128. 単著. (査読有)

⑦福島哲夫 2011 心理療法の３次元統合モデルの提唱−より少ない抵抗と、より大きな効果を求めて−.日本サイコセラピー学会雑誌 第 12 巻第 1 号. 51-59.

〔雑誌論文〕（計 11 件）

〔学会発表〕（計 17 件）

〔図書〕（計 6 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
福島哲夫（FUKUSHIMA,Tetsuo）
大妻女子大学・人間関係学部・教授
研究者番号：60316916

(2)研究分担者
加藤 澄（KATO,Sumi）
青森中央学院大学・経営法学部・教授
研究者番号：80311504

岩壁 茂（IWAKABE,Shigeru）
お茶の水女子大学・人間文化創生科学研究科・准教授
研究者番号：10326522

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：